

# 26PB-am233

「早期体験学習」の薬学教育効果に関する検討（第7報）

○森 和也<sup>1</sup>, 石川 正樹<sup>1</sup>, 林 幹男<sup>1</sup>, 田口 真穂<sup>1</sup>, 柘植 敬子<sup>1</sup>, 八尋 直之<sup>1</sup>, 成田 延幸<sup>1</sup>, 澤木 康平<sup>1</sup>（<sup>1</sup>横浜薬大）

【目的】2006年から薬学部では6年制課程の設置がスタートし、来年度は10年目を迎える現在、その評価が問われている。我々は、直近の過去3年間の早期体験学習に関する学生のアンケート調査をまとめ、6年制薬学教育における早期体験学習の意義について検討した。【方法】1学年在籍学生375名を対象に、病院28施設(166名)、薬局18施設(115名)、研究所5施設(94名)にて早期体験学習を実施した。薬局、病院、企業における薬剤師の役割について、現役の薬剤師や本学の企業出身者の先生より早期体験学習の意義について事前講習会を開催し、学生に受け入れ施設に関する情報を提供した。講習会終了後、学生より実習希望施設の調査を行った。【結果および考察】99%以上の学生が「早期体験学習により学習意欲が向上した」、「薬剤師の仕事が責任ある魅力的な仕事と感じた」、98%以上の学生が「薬学を学んでいく上で早期体験学習は必要」と回答しており、これらの結果は過去3年間、ほぼ同じであった。「印象に残ったこと、考えたこと」に関しては、早期体験学習の訪問先によってかなり異なっていた。病院を訪問先に選んだ学生アンケートでは、「チーム医療、連携」が最も多く、次いで「調剤」、「責任」の選択が多く、薬局は、「調剤」、「服薬指導」や「コミュニケーション」が多かった。他方、企業は、「安心、安全、正確、信頼」が最も多く、次いで「医薬品開発、研究」、「学習意欲、将来」が多かった。参加学生の訪問先により、大きく意識が異なっていることが分かった。以上の結果より、1年次の早期体験学習は学生が薬剤師の実態を把握することにより、学生の学習意欲を向上させ、将来どのような薬剤師を目指すのか、学生のモチベーションの高める上で大変有意義であることが示唆された。